

「上野型埴輪」の成立

右 島 和 夫

1 は じ め に

筆者はかつて「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」と題する小文において、上野地域の後期を中心に埴輪の様相について整理し、その展開および消滅の過程⁽¹⁾を跡付け、さらにその歴史的背景について検討したことがある。そこでは、人物・動物埴輪（特に馬形）が出現する5世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期以降を大きく3段階（前・中期をまとめてⅠ期とし、後期をⅡ—1～3の3期に区分した）にわけて、その具体相を明らかにした。

Ⅰ期は、当地域に横穴式石室が出現する直前の5世紀末葉までの段階で保渡田八幡塚古墳を代表例とし、人物・動物埴輪群が墳丘外の特別の区画内に立体的な配置関係により、特定の場面を表現していることに特徴を見いだした。埴輪樹立の対象となる古墳は、前方後円墳に加えて、群集墳中の帆立貝式古墳や比較的大型の円墳であった。

Ⅱ期は横穴式石室の登場以降、6世紀中葉までの段階とした。埴輪樹立対象古墳はさらに拡大していった段階である。この段階の前方後円墳の良好な資料は認められないが、6世紀前半の帆立貝式古墳である塚廻り4号古墳では、前方部（造り出し部）を人物・動物埴輪群の立体的な配置のための空間としていることから、Ⅰ期の樹立形態が墳丘内の区画で実現されていることを特徴として挙げた。一方、前方後円墳では、実際例は確認されていないが、Ⅰ期を踏襲して墳丘外の特定の区画に樹立されている可能性を示唆した。

Ⅲ期は6世紀中葉から6世紀末葉ないし7世紀初頭の時期で、埴輪は地域内の大半の古墳に認められるようになり、普遍化に近い状況となる。この時期の最大の特徴は、前方後円墳において、人物・動物埴輪が基壇面上にそれぞれの正面を外側に向けて列状に配置されるようになることであり、本来の配置意図が大きく失われ、墳丘表飾として視覚的效果に重点を置いたものに変質していったことを指摘した。基壇面への列状の配置は、帆立貝式の墳丘形式の存在意義を失わせ、中・大型円墳にその位置が取ってかわられた。この最終時期の埴輪樹立の様相は、次にくる突然の消滅の前にしてはあまりにも盛況のピークにあることから、その過程に外的（大和政権）な強い圧力が作用していることが十分推測された。

上記の小文を発表後、多野郡吉井町で6世紀後半の小型円墳（下條1・2号古墳）で大量の埴輪群が出土する調査を担当する機会にめぐまれた。その後の調査報告書（『神保下條遺跡』）の作成過程で、それまで知られている上野地域の埴輪出土古墳を網羅的⁽²⁾（1155基にのぼった）に当たったところ、群集墳中の小型円墳における樹立傾向や器財埴輪の組成変化についても新たな知見が得られたので、その報告書の中で簡単にまとめておいた。特に注意されるのは、前稿の中でⅡ期

とした段階には、この後最終の段階までほぼ普遍的な組成として認められる盾・大刀・靫・靫・髷が出揃う時期であり、それ以前に認められるのは盾・蓋のみであることが明確化できた。

なお、⁽³⁾2期に入ると蓋が激減し、3期には完全に無くなることも明らかにし得た。このように見てくると、1期から2期への展開も、他の時期に比肩しうる画期点にあったことが想定されてきた。

最近、前橋市教育委員会によって、6世紀前半に位置付けられる前二子古墳・中二子古墳の大型前方後円墳の調査が実施され、良好な埴輪資料が得られた。その他にも埴輪出土古墳の調査が数多く実施されてきている。また、かつて高崎市の教育委員会によって調査された5世紀後半の大型帆立貝式古墳若宮八幡北古墳や前橋市教育委員会によって調査された6世紀初頭⁽⁴⁾の大型前方後円墳王山古墳⁽⁵⁾の出土埴輪の基礎的整理が実施され、1期から2期への展開過程をより具体的に把握⁽⁶⁾することを可能にしている。

以上の動向を踏まえ、本稿では以下の点について検討を試みることにした。まず、以前におこなった上野地域の後期埴輪の変遷過程の整理を、その後の資料を加味して再検討してみたい。ここでは、従来、不分明であった各段階の内容がより具体的になるとともに、各期の画期性がより明確化されるものと思われる。その上で、その画期をもたらしした歴史的背景について考えてみたい。その際、6世紀前半に定型化したことが推測される当地域特有の形象埴輪の組成（男女の人物、馬、盾持人、家、盾・大刀・靫・靫・髷、その他）を「上野型埴輪」と仮称し、その成立背景に重点をおいて検討を試みたい。

言わば旧稿の改訂版的な側面も有していることになる。旧稿と本稿との間での、個々の資料理解の相違点は、その後の筆者の訂正点として理解していただきたい。

なお、旧稿の内容との混乱をさけるため、後期における人物・動物埴輪出現以降を3期に分類した各段階はそのまま踏襲し（1期は5世紀第3四半期ないし第4四半期から5世紀末葉にかけて、2期は6世紀初頭から中葉にかけて、3期は6世紀中葉から6世紀末葉ないし7世紀初頭にかけて）、人物・動物埴輪が出現する以前の5世紀第3四半期の段階を新たに「1'期」として論を進めることとしたい。

次に、各段階に対して付与した実年代の根拠を簡単に示しておくこととする。

1'期は、窖窯焼成によると思われる無黒斑のB種横ハケの円筒埴輪を伴う。前方後円墳では、長持形石棺の影響を受けて身が箱形を呈する舟形石棺を棺形式とする。また、主としてTK208⁽⁷⁾に平行する須恵器を伴う。

1期は、B種横ハケ⁽⁸⁾はその前半期に極めて客体的に認められるものの、大勢は縦ハケのみである。前方後円墳をはじめとする大型古墳の埋葬施設には、身部が舟底形に丸みを帯びる舟形石棺が、群集墳中の小型円墳には人体がかりうじて入るぎりぎりのスペースの竪穴式小石槨が伴うのが特徴的である。馬具の副葬が始まるのはこの時期からであり、TK23からTK47に平行する須恵器を伴う。なお、5世紀末葉ないし6世紀初頭の降下が推定される榛名山二ツ岳火山灰層が古

墳の周堀の埋没土中に認められるのが一般的である。

2期は、当地域で横穴式石室が登場する時期から、高崎市の綿貫観音山古墳に代表される巨石使用横穴式石室が登場する以前の段階までである。石室内に須恵器を中心とした土器類が副葬されるようになる。その須恵器はMT15からTK10に平行している。

3期は、巨石使用の大型横穴式石室に環頭大刀・頭椎大刀等の装飾付大刀、金銅・銀・銅製の装身具・馬具・容器類等の豪華で豊富な副葬品が伴うのが特徴的である。主としてTK43からTK209に平行する須恵器を伴っている。

2 上野地域における後期埴輪の諸段階

近畿地方の古墳時代の時期区分の中で指摘されている、5世紀後半の段階に時期的な画期点を見出し、「後期」段階とする和田晴吾に代表される最近の理解は、当地域においても変化の様相がこれにほぼ呼応しており妥当性をもっていると言えよう。⁽⁹⁾埴輪樹立の様相においてもこの時期を境に大きく変化していく可能性が強い。以下、当地域における後期の埴輪の様相を各段階ごとに順を追って見ていくことにしたい。なお、前・中期の埴輪との区分を明確にするために、まずその概述からはじめたい。

(1) 古墳時代前・中期の埴輪

古墳時代前期後半に開始された上野地域の埴輪樹立は、中期の段階をむかえると一定の定着が見られる。5世紀初頭を前後した時期の築造が推定される高崎市の浅間山古墳(同171.5m)や同じく大鶴巻古墳(墳丘全長123m)、あるいは太田市の宝泉茶臼山古墳(同165m)などの定型的な周濠を備えた典型的な中期の前方後円墳の成立と軌を一にして定着を見たと言えよう。これに続く5世紀前半から中葉にかけての時期、藤岡市の白石稻荷山古墳(同145m)や赤堀町の赤堀茶臼山古墳(帆立貝式、墳丘全長45m)に代表されるように家形埴輪や器財埴輪に特徴を有する古墳が輩出し、当地域の埴輪樹立が一段と活況を呈したことがうかがえる。これと同時期で、畿内の工人が直接製作した可能性の強い長持形石棺を有している太田天神山古墳(同210m)や伊勢崎市御富士山古墳(同125m)には、さらに充実した内容の埴輪が樹立されていたことが十分推測される。

この5世紀中葉の時期までの当地域の埴輪樹立については、少なくとも次の2点について確認しておく必要がある。まず第一は、この時期までの東国の他地域に比べるとより定着の度合いが高かったことである。そのことは、調査により具体的な内容が押さえられている白石稻荷山古墳や赤堀茶臼山古墳の充実した埴輪群を見れば明らかであろう。個々の埴輪を見ても、その先進地域である近畿地方のものに近い内容を示していることから、その生産に彼の地の技術者が深く関与していたことは明らかであろう。このことは、5世紀後半以降の当地域の埴輪が飛躍的な展開を示していく上でも、その基礎的な条件を整備する一端を果たしたことが推測されよう。

第二には、埴輪樹立が一定の定着・発展を見たといっても、その対象となる古墳は極めて限ら

れたものであった点である。それは主として前方後円墳・帆立貝式古墳であり、大型円墳のごく一部であった。当該期の前方後円墳自体の数がわずかであるので、たとえ一つ一つの古墳の規模がいかに大きくとも、当地域で必要とされる埴輪の総量は限られたものであったと言わなければならない。一古墳の埴輪を生産するためには、その量からいって、ある程度組織的な生産体制を必要としたであろうが、恒常的な組織化の必要性はなく、一回性のものであったことが推測されよう。

(2) 1' 期

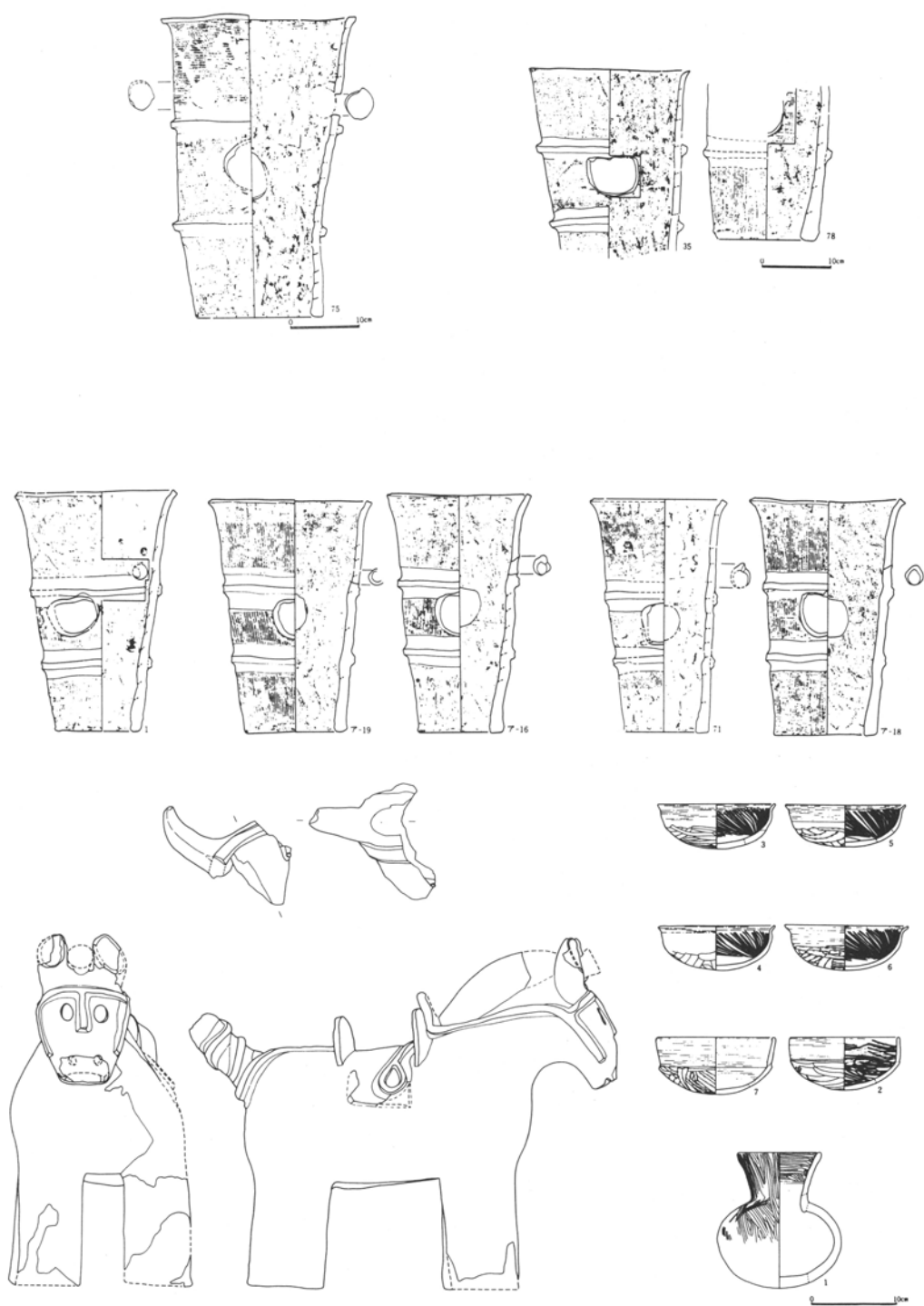
5世紀第3四半期の時期、前代に築造された太田天神山古墳のような巨大前方後円墳の築造は継続しない代わりに、地域内の各地に墳丘全長100m前後の大型前方後円墳が散在的な位置的関係で築造されるようになる。特に、それ以前には顕著な前方後円墳の認められなかった赤城・榛名山の山麓地域にまで分布が広がるようになる。規模こそ縮小するものの、築造された前方後円墳の数は大幅に増している。平地部では高崎市の岩鼻二子山古墳（墳丘全長約125m）、不動山古墳（同94m）、太田市の鶴山古墳（同102m）、山麓部では前橋市の今井神社古墳（同71m）、伊勢崎市の丸塚山古墳（同81m）、高崎市の上並榎稻荷山古墳（同約120m）等が代表的なものである。また、これと軌を一にするように帆立貝式古墳を含む小型円墳からなる群集墳（「初期群集墳」）が一斉に登場してくるのもこの時期である。

前方後円墳から出土する埴輪は、いずれの古墳の場合も、無黒斑でB種ヨコハケの円筒埴輪⁽¹⁰⁾を一定の量含む点に特徴がある。⁽¹¹⁾

埴輪の様相がある程度把握できるのは、発掘調査が実施された今井神社古墳と不動山古墳である。そのうち、今井神社古墳の出土埴輪については整理が進んでいる。得られた埴輪は、円筒埴輪と朝顔形埴輪であり、比較的発達した断面M字形の凸帯と半円形透孔⁽¹²⁾を特徴としている。中には須恵質に近い焼成のものも認められる。これらのうちには形象埴輪は認められないが、墳丘裾から周堀にかけての狭い範囲のトレンチ調査であったことも関係しているかもしれない。不動山古墳の場合も無黒斑のB種ヨコハケの円筒類が顕著である。前方部の墳頂および後円部との鞍部から原位置ではないが家・器財形埴輪（種類は不明）と思われる破片の出土が報告されている。

一方、いわゆる初期群集墳に属する古墳群では、それぞれの形成の端緒をなす古墳が、この時期⁽¹³⁾に求められる事例が多い点が注意される。主なものを挙げれば、前橋市富田遺跡群、勢多郡粕川村白藤古墳群、佐波郡赤堀町地蔵山古墳群、同境町下淵名古墳群、高崎市八幡原古墳群、同道場遺跡群、富岡市上野原古墳群、新田郡尾島町尾島第2工業団地古墳群、大泉町古海松塚古墳群等々である。この種の群集墳は、低墳丘でしかも後世の削平が及んでいるため、偶然に発見されるケースが多く、今後も発掘調査により新たに発見される事例が確実に増えることが予測される。当地域における初期群集墳の成立が、一斉でしかも広範囲に及ぶものであったことがわかる。

これらのうち、大泉町の古海松塚11号古墳（帆立貝式、墳丘長39m）からはB種横ハケの円筒埴輪、TK208に平行する須恵器とともに馬形埴輪と女子人物2個体が出土している。現在までの⁽¹⁴⁾



第1図 白藤古墳群出土埴輪・土器 (小島註(23)文献)

(上左Y₁-5、上右Y₁-2、下V-4号)

ところ、知られている当地域最古の事例である。

ところで、これら初期群集墳でB種横ハケの円筒埴輪を伴う事例を1'期(5世紀第3四半期)と大きく一括しておいたが、強いて言うならば、第3四半期のうちでも次の1期の時期に近接した事例が多いのではないかと考えている。というのは、個々の群集墳について、古墳の構成を見てみると、1'期に属するものはごく少数であり、大半は1・2期に属するものである。群集墳の形成が、わずかな1'期のものを端緒として、大多数の1・2期のものに連なることは、形成初期のものが1期の直前に築造された可能性の強いことを窺わせるからである。そこで、実際の埴輪で見えてみると、器面のハケ調整の相違を除けば、両者とも器高35cm前後、口径25cm前後、2条凸帯の3段構成で中段に半円形透孔を持つものが主体的であり、群集墳用の定型化した円筒埴輪成立への連続的プロセスにあることを窺わせる。

古海松塚11号古墳の場合も1期に近い時期の所産と考えることにより、1期の段階に当地域で広く人物・動物埴輪が認められるようになることが無理なく理解できよう。なお、1'期に属する前方後円墳で人物・動物埴輪を伴う事例は現在までのところ認められていない。しかし、これらについても、今後調査が古墳の全域に及ぼされるならば、確認される可能性も残していると言えよう。

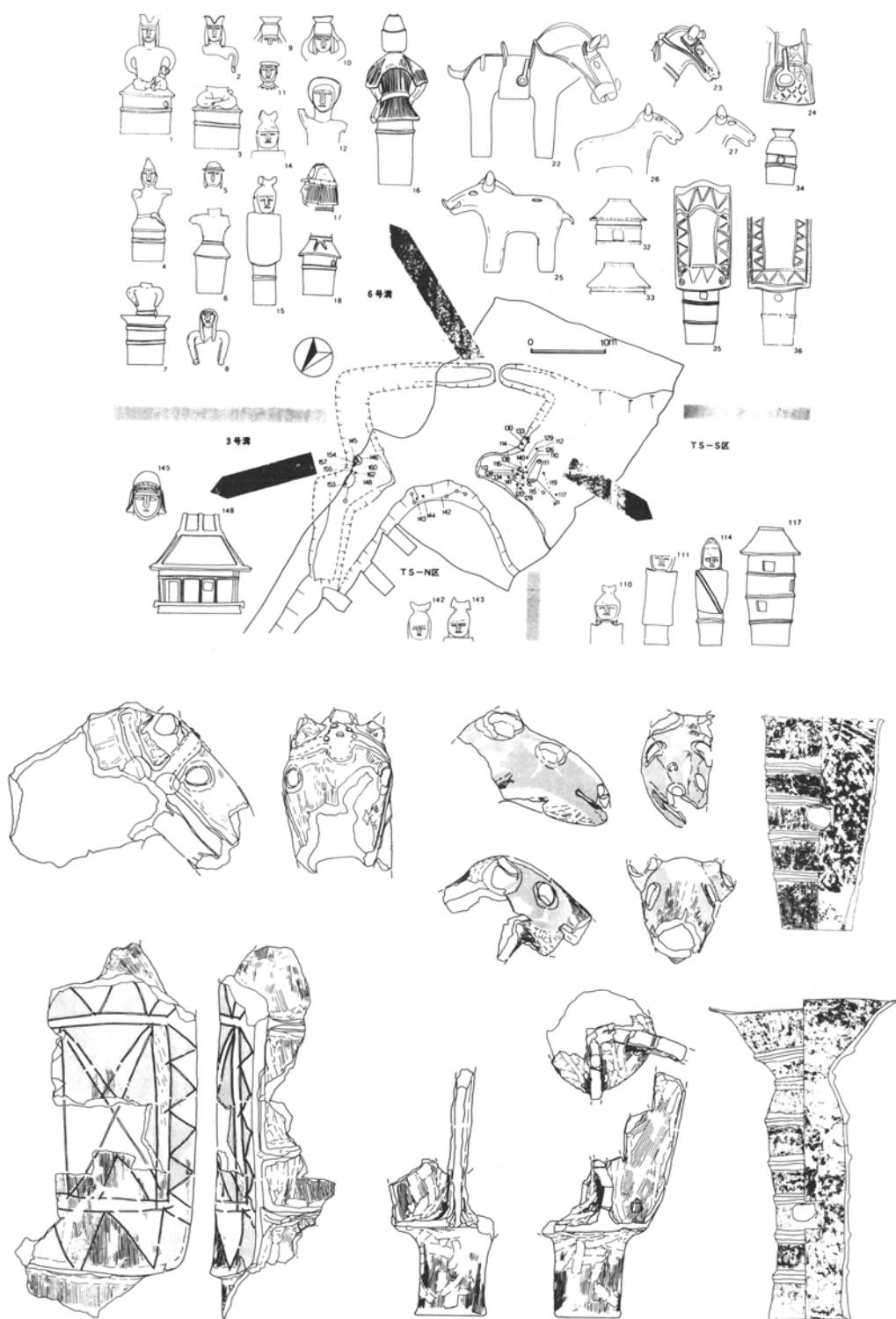
(3) 1 期

前方後円墳における人物・動物埴輪は、現在までのところ群馬町の井出二子山古墳(愛宕塚、墳丘長108m)が最も早い事例である。これは、近接して位置する同程度の規模の前方後円墳である保渡田八幡塚古墳(同102m)、保渡田薬師塚古墳(同105m)とともに、保渡田古墳群を形成しており、二子山→八幡塚→薬師塚の順に造られた代々の首長の墓と考えられている。二子山が5世紀第3四半期から第4四半期にかけて、八幡塚が5世紀第4四半期、薬師塚が5世紀末葉の時期の築造と考えられる。

⁽¹⁵⁾ 二子山古墳の場合、埴輪列の遺存状況が良好でなかったため具体的な内容はあきらかでないが、中堤上の一角に人物・動物埴輪が集中的に配置されたことだけは確認されている。また、後円部墳頂から転落したと推定される蓋形埴輪の破片が周堀内から確認されている。この古墳に伴う円筒埴輪には、極めてわずかのB種横ハケが確認される以外は、すべて一次調整の縦ハケである。

最近調査が行われた前橋市の舞台1号古墳(帆立貝式、墳丘長40m)は、前方部から箱形の容器に収まっていたことを推測させる状態で大量の滑石製模造品が出土して注目を集めたが、これに伴う円筒埴輪においても、B種横ハケは極めて客体的な存在であった。また、前方部に配置されていたと考えられる人物埴輪、馬形埴輪および鶏、家、盾、蓋形埴輪が出土している。舞台1号古墳の石製模造品は、横矧板鉾留短甲、小札鉾留眉廂付・同衝角付冑を出土した⁽¹⁶⁾5世紀第3四半期の鶴山古墳の石製模造品から若干後出するものと考えられている。本墳は、埴輪の様相が近似している井出二子山古墳と時期的にも近いものと考えてよいであろう。

これらに続く5世紀第4四半期の保渡田VII遺跡や八幡塚古墳の埴輪においては、次のような変



第2図 保渡田Ⅶ遺跡・全体図(上)・若宮八幡北古墳出土埴輪(下)
(若狭註(17)文献、南雲ほか註(15)文献)

化が認められる。まず、円筒埴輪にB種横ハケがまったく(ほとんど)認められなくなることである。この時期に属する他の埴輪出土古墳も同様の傾向であることから、上野地域において窖窯焼成のB種横ハケの行われた時期は5世紀第3四半期を中心とした極めて短期間のことであったことがわかる。

また形象埴輪についてみると、その種類・量がそれ以前にくらべて大きく増えていることがわかる。例えば、全長35m前後の帆立貝式古墳の可能性も考えられる保渡田VII遺跡の場合、最低でも人物37個体(男・女・盾持人)、動物9個体(馬・犬・猪)、家1個体、器財9個体(蓋・盾・壺)の計56個体を数える。古墳の遺存状態を踏まえると、本来はこれより一段と多い量にのぼったことが推測される。⁽¹⁸⁾一方、八幡塚古墳では、中堤上で確認された人物・動物埴輪を設置するための2カ所の長方形区画(A、B区)のうち、遺存状態の比較的良好なA区では、人物33個体、馬8個体、水鳥6個体、鶏2個体と種類不明の抜き取り痕5個体分の計54個体が最低樹立されていたことがわかる。⁽¹⁹⁾この中に家・器財は認められないことと、B区で確認できたものも複数の人物、馬であったことから、家、器財は主として埴輪頂部に配置されていた可能性が高い。なお、最近の調査により、外堤上の要所に外側を向けて複数の盾持人が出土し、A・B区の人物・動物埴輪とは、配置形態の上からもその樹立意図に大きな相違があることが推測され注目された。⁽²⁰⁾

長年にわたる出土埴輪の再整理により、その全貌が明らかにされた高崎市の若宮八幡北古墳(帆立貝式古墳、墳丘長46.3m)は、舟形石棺や円筒埴輪の特徴から、5世紀第4四半期の築造が推定される。本墳に伴う形象埴輪は、主として周堀内から出土した破片資料であるため、本来的な数量の把握は困難である。しかし、逐一破片に当たって検討された結果、極めて豊富な人物・動物(馬・犬・鹿・その他)が盾持人、家、器財(盾・蓋)とともに存在することが明らかになった。その樹立位置を見てみると、人物・動物埴輪が前方部およびその北西側に隣接する長方形の造り出し部の周辺から集中的に出土しているのに対し、盾持人・盾・蓋は比較的全体から平均的に出土している。このことは両者の間の樹立位置の相違に基づいていることが推測されるところである。おそらく、盾持人は墳丘第二段を取り巻くように基壇面上に配され、盾・蓋は主体部を取り巻くように後円部墳頂に置かれていたものと推測される。家については樹立位置を推定するまでの材料に乏しいが、これも埴輪頂部としてよいであろう。

この時期の群集墳を構成する円墳から出土する埴輪は、基壇面をめぐる円筒列のほかは、わずかな人物・馬のみであり、現在までのところ盾持人・家・器財は認められない。その好例は、時的には6世紀前半にまで下る可能性があるが、構造的にこの時期のものとまったく変わらない尾島町第2工業団地遺跡3号墳(円墳、径16.5m)である。この種の古墳としては極めて遺存状態の良好な埴輪列が発見されたが、その内容は、基壇縁辺部を全周する円筒列の列中の一角に2頭の馬を側面を外側に向けて並べて配し、そのすぐ内側から、馬の傍らに馬子1と相互に向かい合う4個体の人物(男2、女2)が配されていた。5世紀第4四半期と推定される白藤古墳群のV-4号古墳(円墳、径21.6m)では、円筒埴輪とともに馬形埴輪2個体分が出土している。そのう

ちの1個体は、基壇面をめぐる円筒列中に配置されていたことが確認されている。前記の尾島町第2工業団地3号墳に近い配置形態を取っていたことが推測されると同時に、この形態が1期に⁽²³⁾まで逆上ることを確実にしていると言えよう。

形象埴輪の種類・量に、前方後円墳・帆立貝式古墳と中・小型円墳との間に格段の差が設けられていたことがわかる。また、群集墳の円筒埴輪は2条凸帯の3段構成、前方後円墳をはじめとする大型古墳のそれは、3条凸帯の4段構成という分化が明確化するのも、これに呼応した動きであろう。

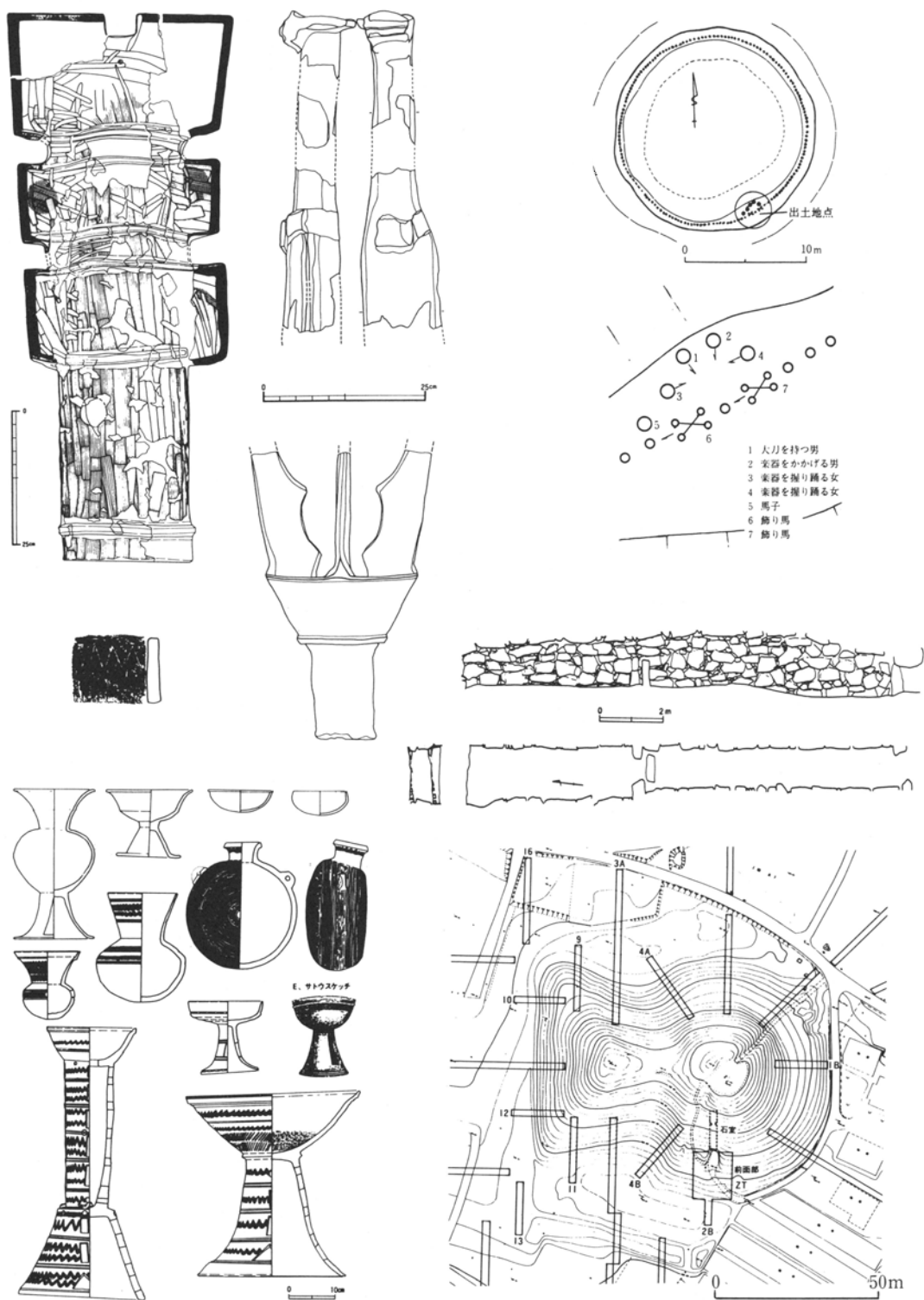
(4) 2 期

前橋市の王山古墳は全長75.6mの前方後円墳で、当地域では最も古い横穴式石室を有しており、6世紀初頭の築造が推定される。この時期の大型古墳としてはめずらしく墳丘の全面が調査され、埴輪もある程度まとまって出土している。⁽²⁴⁾埴輪の大半は、後円部の基壇面上あるいは墳丘裾に転落した第一・第二段の葺石材とともに出土したものである。特に基壇面上から出土するものが多く、しかも崩落した第二段の葺石材に混じった状態で出土していることから、その樹立箇所が本来は墳頂部にあったことが推測される。埴輪の種類としては、盾と大刀、及び円筒が大半である。完形に復せるものは少ないが、大刀は10個体以上に、盾もこれに近い数にのぼるものと思われる。恐らく、中心を取り囲むように墳頂部の縁辺寄りに配されていたものと思われる。盾は上端が弧状を呈する通例のもので、実物を比較的忠実に模していることが窺われる。大刀は三輪玉を連ねた勾金の付くもので、刃の側を尖らせたり、柄の部分の太さを微妙に調整したり、やはり実物を強く意識した形状になっている。実際のものより大分大振りにしている点に注意される。

ところで、比較的大量の埴輪片が出土したにもかかわらず、これらの埴輪の中には、武人埴輪の頭部（衝角付冑をかぶっている）の小破片1点以外の人物に関わるものは認められないし、動物埴輪は皆無である。1期の配置形態を踏襲して、中堤上の一画等に集中させた可能性が極めて強いと言えよう。

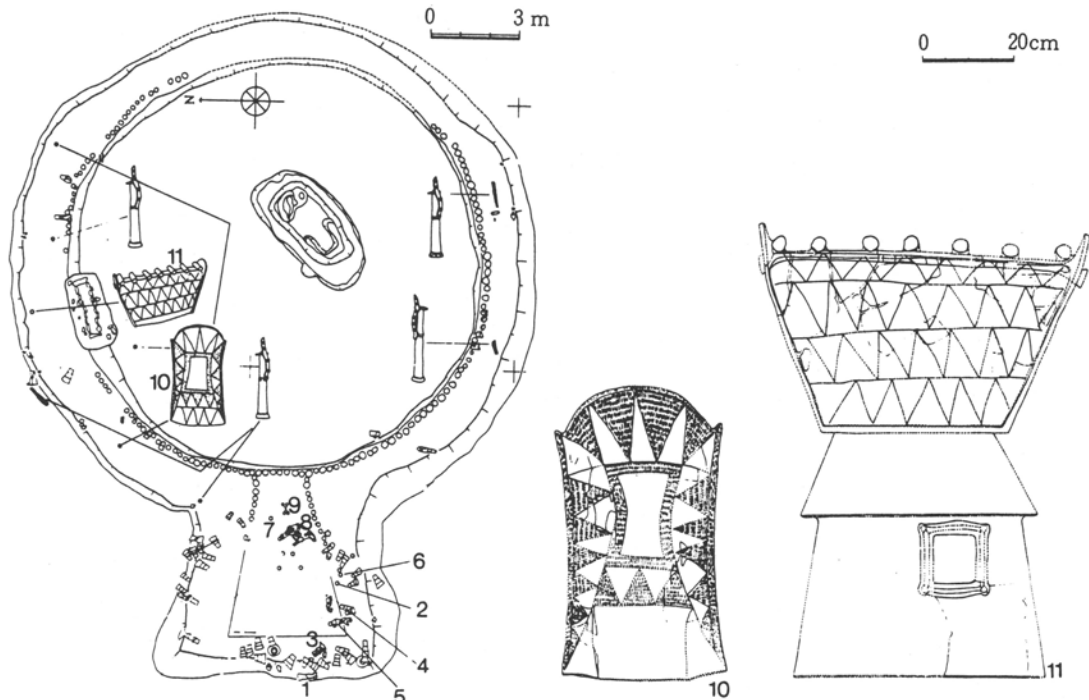
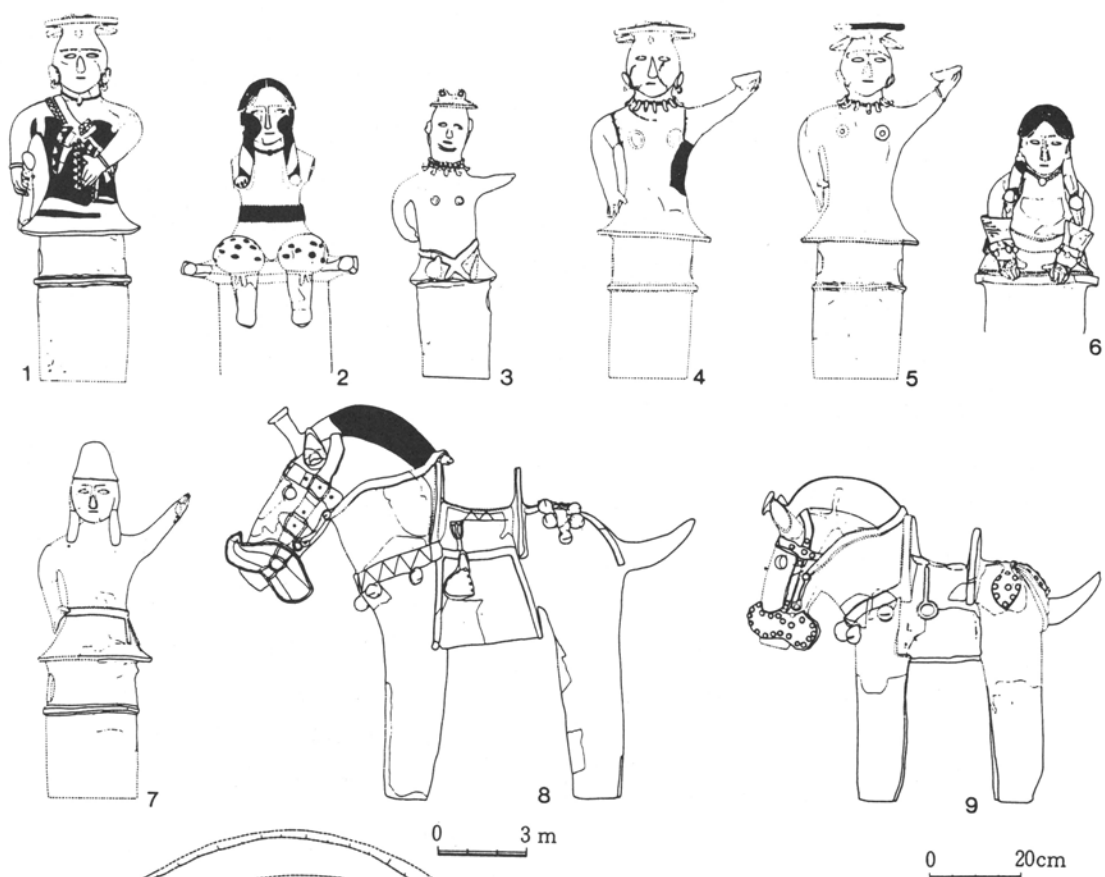
先年調査された前橋市の前二子古墳（前方後円墳、墳丘長93.7m）は、王山古墳とほぼ同時期の⁽²⁵⁾もので、やはり初現的な横穴式石室を有するものである。石室内から出土した須恵器の一群はMT15に平行するもので、6世紀初頭の築造と考えられる。出土した埴輪資料は、調査範囲が限定されていたこともあって、基壇面の縁寄りに密立状態で確認された円筒埴輪が豊富であることを除けば、形象は破片資料が大半であり、量も少ない。そのため、本来的な樹立位置を特定することは困難である。種類としては、人物・馬に加えて盾持人・家・器財（蓋・盾・大刀・靱）がある。大刀は王山古墳とともに、靱については本例が、上野地域における初現的なものである。なお、盾には、上端が弧状をなす通例のものに加えて、いわゆる石見型盾が1点確認されている。非常に豊富な盾形埴輪資料を有する当地域とはいえ、この種の盾資料は極めて希有の例であり、本墳に樹立された経緯に興味を持たれる。

ごく最近調査された中二子古墳（前方後円墳、同111m）は、隣会う前二子・後二子古墳とともに



第3図 前二子古墳墳丘・石室・埴輪・土器及び尾島第2工業団地3号墳(右上)

(前原註(4)①文献、群馬県立歴史博物館註(22)文献)



第4図 塚廻74号古墳埴輪出土位置図
(石塚註文献を下に作成)

大室古墳群を構成しており、6世紀初頭の前二子古墳に引き続いて6世紀前半に造られたものである。2年次にわたる調査の結果、比較的まとまった量の埴輪資料が得られた。埴輪の樹立位置⁽²⁶⁾を見てみると、円筒列は中堤の縁辺部に沿って2列と墳丘基壇縁辺部に沿って1列が原位置で確認された。形象埴輪は、種類としては人物・盾持人・器財（大刀・靫・靫・髷）がある。人物は後円部の南方向の中堤上から、靫・靫は後円部の墳頂から出土している。恐らく前代の配置形態を踏襲して、中堤上の一面に人物・動物埴輪が集中的に配され、後円部の墳頂部に盾・大刀・靫・髷が配されたものと思われる。

一方、盾持人は墳丘の南から西にかけての中堤上の外側の円筒列の内側に、適当な間隔をおいて正面を外側に向けて配されていたことが推測されている。

6世紀前半の近接した時期に相次いで形成された塚廻り古墳群（1～4号古墳）の埴輪については、報告書・各種論稿等で幾度となく紹介されているので、ここでは埴輪組成及び配置形態にしぼって触れておきたい。⁽²⁷⁾全面調査により埴輪の全貌が把握できたのは4号古墳（帆立貝式古墳、全長22.5m）である。円筒列は円丘部の第二段の裾部（基壇面の奥まった部分）を全周し、そこから前方部の縁部にそって台形状の区画が派生している。後者は様々な像容表現をした15個体の人物と2個体の馬を集中的に配置するための空間である。器財埴輪（盾・大刀）は各5個体以上が円丘部を取り巻く円筒列の外側の基壇テラス面に交互に適当な間隔をおいて配されていたと推定されている。また、入母屋式の家は墳頂に置かれていたとされている。

報告書で推定された器財の配置形態には若干疑問がのこるが、少なくとも人物・動物と家・器財の樹立箇所が、この段階でもはっきりと分けられていたことと、盾・大刀が交互に墳丘の中心部を取り巻いていた点は、調査からは配置形態を具体的に知ることができない資料を検討していく上で参考になろう。

前項で尾島町第2工業団地3号墳の埴輪について述べたように、この2期の中・小型円墳でも、前代の組成・配置形態を踏襲して、墳丘基壇面の一面にわずかな人物・馬を集中的に配置していたことに触れた。これらは家・器財を欠くものの、基本的にはこの時期の前方後円墳、帆立貝式古墳の配置原理に通ずるものであったと言えよう。この時期で横穴式石室を主体部とするものでは、6世紀初頭の安中市後閑3号墳（円墳、径約20m）が挙げられる。埴輪は、基壇縁辺部をめぐる円筒列とその内側で墳丘西側の一面に集中する人物2・馬1・家1・盾1からなる。後者のうち、人物・馬にくらべると家・盾は欠損部分のほうが多いことから、本来的にはこの位置ではなく、墳頂部から転落してきた可能性がある。

なお、1期の円筒埴輪における2条凸帯、3条凸帯の使い分けに加えて、多条凸帯の円筒埴輪が大型前方後円墳（前二子古墳、中二子古墳等）に使用されるようになる点もこの段階の新たな変化の傾向として注意される。

(5) 3 期

榛東村の高塚古墳（前方後円墳、墳丘長60m）は、6世紀中葉の降下が推定されている榛名山

二ツ岳の噴火軽石層（F P）が直接おっており、しかも横穴式石室構造が、TK10に平行する⁽²⁹⁾須恵器群を伴う高崎市の上小埜稻荷山古墳のそれによく似ている。このことから、本墳の時期は6世紀第2四半期から中葉にかけてとすることができる。ところで、本墳の埴輪のうち、人物（武人）・弓と種類不明の形象基部は、埴丘南側の後円部からくびれ部にかけての基壇面上に列をなして発見された。調査をこの周囲に広げれば、さらに人物・馬等が確認されるであろう。また家、器財（靱・靱）が後円部の埴頂から斜面にかけて発見されており、これらが元は後円部埴頂に配置されていたものであったことがわかる。

典型的な前方後円墳で人物埴輪が埴丘基壇面に列状に配置されるものとしては、現在までのところ本墳が最も古い例である。人物・動物を基壇面上に列状に、家・器財を主として後円部の埴頂に樹立する配置形態は、この後埴輪消滅直前にいたるまで継続していく。

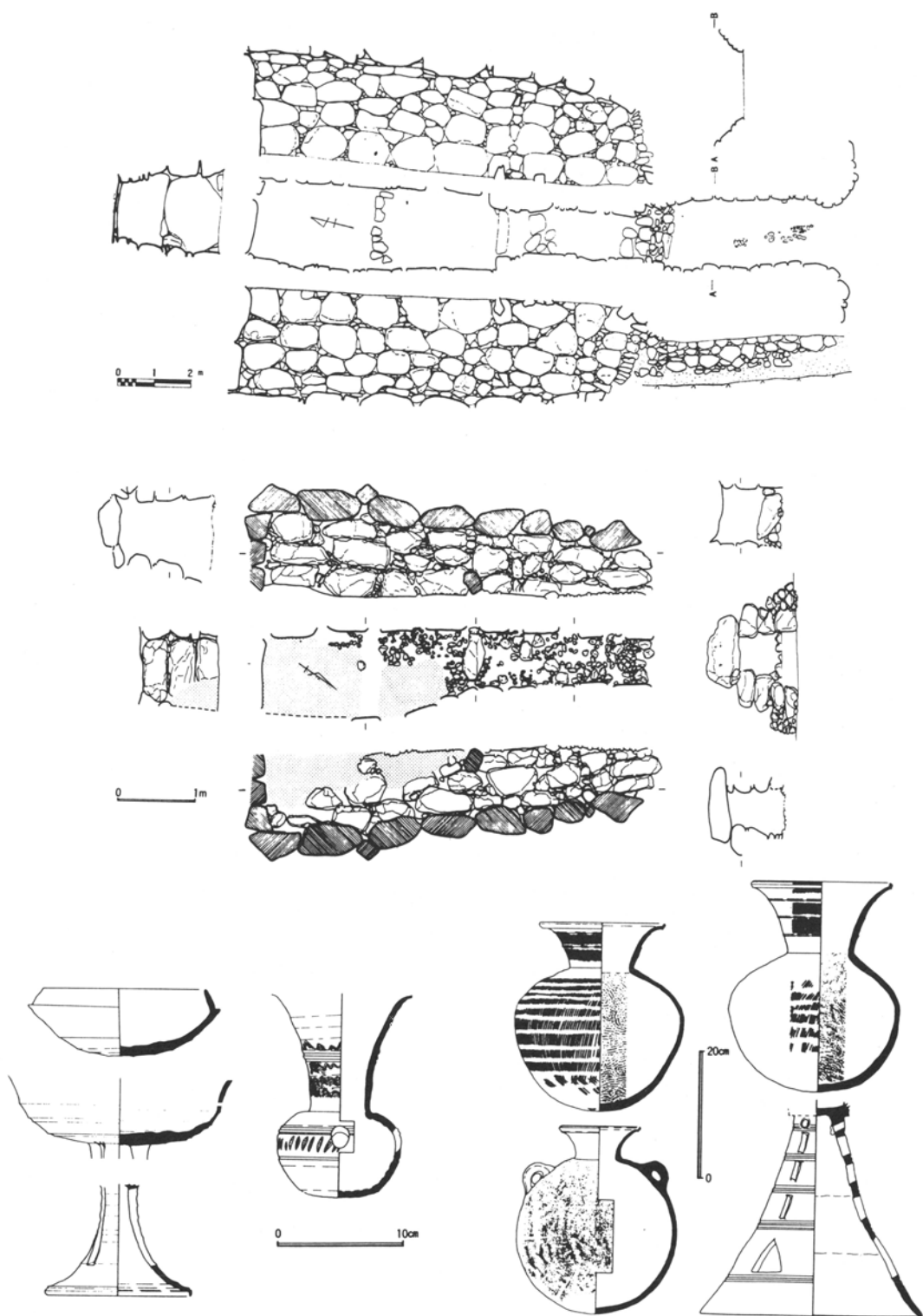
このような配置形態を取る代表的な前方後円墳として、6世紀第3四半期の高崎市綿貫観音山古墳（埴丘長97m）が挙げられよう。長期間にわたる埴丘調査により、基壇面を中心に埴輪配置の全貌を復元できる豊富な資料が得られ、この時期の埴輪樹立の充実ぶりが窺われた。

人物・動物埴輪の基壇面上への列状配置の成立により、それらの集中的配置のための特別な空間としての機能を果たしていた帆立貝式古墳の前方部（造り出し部）は、一義的な意味を失うことになった。そのため、この埴丘形式は3期の段階には消滅の一途をたどった。

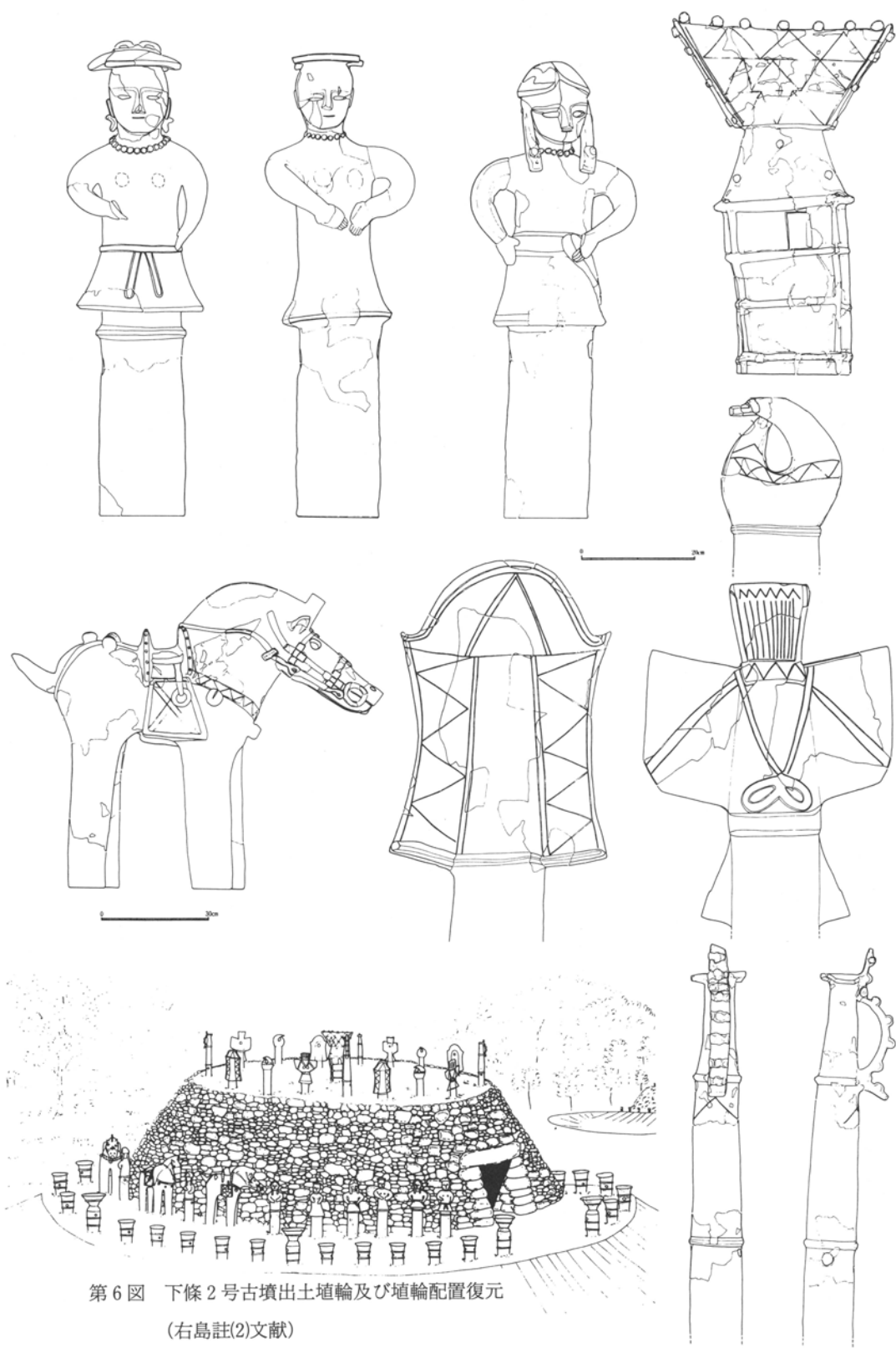
富岡市の芝宮古墳群は主として6世紀後半から7世紀にかけての約100基の円墳からなる群集墳である。この古墳群の中では比較的大型の部類に属する6世紀後半の富岡79号古墳（円墳、径17m）が調査されたところ、大量の埴輪が出土して注目を集めた。そのうち形象埴輪は、少なくとも人物8個体（男子5、女子3）、馬3個体、家3個体、器財16個体（蓋2、盾1、大刀5、靱3、翳3、帽子2）を数えることができた。埴輪の遺存状況があまり良好でなかった上での把握できた数であるから、本来はこの数を大きく上回る可能性が強い。人物・馬の配置は、石室の開口部の西側の基壇面を起点として、北西側へと列をなしていたことが推測されている。家・器財は埴丘周囲全体から認められることから、埴頂部に立てめぐらされていたものと推定される。

6世紀代の横穴式石室を主体部とする円墳14基を調査した高崎市の少林山台古墳群では、そのうちの13基に埴輪が伴っていた。この時期の上野地域における埴輪の盛況ぶりをよく物語っている。調査古墳のうちで最も規模の大きい2号古墳（円墳、径30m）からは、男女の人物埴輪と、家、器財（盾・大刀・靱・靱・翳・矛）が大量の破片となって出土しており、埴丘の崩壊とともに多くは失われてしまったが、本来的な数はかなりの量にのぼるものであったことが推測される。その出土状態から、人物埴輪は石室開口部の西側の基壇面上に列をなしてめぐり、家・器財は埴頂部に配されていたことが推定されている。

上記の2古墳などは、この時期以前であれば、おそらく帆立貝式古墳を造り、前方部（造り出し部）に人物・動物埴輪を集中的に樹立していたものに該当するであろう。やはり、充実した形象埴輪を伴っていた太田市のオクマン山古墳（円墳、径36m）や藤岡市の皇子塚古墳（円墳、径



第5図 高塚古墳石室（上）及び上小埜稲荷山古墳石室・須恵器
 (石川註(29)文献、右島ほか註(30)文献)



第6図 下條2号古墳出土埴輪及び埴輪配置復元
(右島註(2)文献)

30m)なども同様であろう。このような古墳の数は枚挙に遑がないところである。

この3期においては、もう一つ特筆して置かなければならない点がある。それは群集墳を構成する中・小型円墳の多くにも充実した内容の埴輪が樹立されるようになったことである。その具休相を吉井町の下條1・2号古墳、甘楽町⁽³³⁾の天引口明塚2号古墳の調査で知ることができた。

下條2号古墳は、総数91基以上からなる多胡古墳群に属している。径10mにも満たない横穴式石室の小型円墳で、かろうじて残る墳丘南西側部分について調査したものである。調査の結果、基壇縁辺部に円筒列が配され、同じ面の中心寄り(第二段裾部)に人物・馬が列をなして確認された。その数は、少なく見ても、女子5個体、男子6個体、不明2個体の13個体であり、馬は最低3個体はある。一方、家・器財(盾・大刀・靱・靱)は、少なくとも家1個体、盾4個体、大刀5個体、靱4個体、靱4個体の存在が確認できる。その配置は、墳頂部に家を中心に、器財の4種類が交互に配されてめぐっていたことが、出土状態から推測された。

下條2号古墳の充実ぶりが、この時期の小型円墳の中で特殊なものでないことは、隣接する同程度の規模の下條1号古墳、口明塚2号古墳の調査でも同様に確認できたことからわかる。その他の当該期の埴輪出土古墳についても徹底的にその組成を追求するならば、恐らく同様の結果が得られるものと確信している。

なお、この後にくる埴輪の消滅過程については、旧稿に詳述してあるので、参照されたい。

3 上野地域における後期埴輪の画期性

(1)上野地域における後期埴輪の編年の整理

前節までで述べてきた上野地域の後期埴輪の各段階の特徴を整理すれば、以下の通りである。

1'期 5世紀第3四半期。無黒斑のB種横ハケを一定量含む。

その後半段階には人物・馬が一部で登場する。

1期 5世紀第3四半期ないし第4四半期から末葉にかけて。

その前半期にはB種横ハケが極めて客体的に残存する。

形象埴輪は多種・多様な人物埴輪と動物埴輪(馬・犬・猪・鹿・水鳥・鶏)、盾持人、家、器財(盾・蓋)から構成される。

前方後円墳では人物・動物群を中堤上の特別の区画内に、家・器財を後円部墳頂に樹立する。帆立貝式古墳では人物・動物埴輪群を前方部(造り出し部)に、家・器財を後円部墳頂に配する。また円墳では基壇面上の一画に、わずかな人物・馬を集中的に配置する。

群集墳には2条凸帯の円筒埴輪、前方後円墳をはじめとする大型古墳には3条凸帯の円筒埴輪が使用される。

2期 6世紀初頭から前半。

盾・大刀・靱・靱・髷からなる器財埴輪の組成が成立する。6世紀初頭までは一部の古

墳に蓋がかろうじて残存するが、その後消滅する。動物埴輪の種類が馬に限定される傾向が強くなる。

前方後円墳・帆立貝式古墳・円墳ごとに認められた形象埴輪の配置形態は、基本的に1期のそれを踏襲する。器財は墳頂部の縁辺部に異なる種類を交互にして配置される。

大型前方後円墳に多条凸帯の円筒埴輪の使用が始まる。

3期 6世紀中葉から6世紀末葉ないし7世紀初頭にかけて。

形象埴輪の種類は2期を踏襲。

人物・動物埴輪群が横穴式石室の開口部脇を起点として、それぞれの埴輪の正面(馬は側面)を墳丘外側に向けて列状に配置される。家・器財は2期を踏襲して墳頂部に配される。

前方後円墳から小型円墳にいたるまで、形象埴輪の組成を共有するようになる。

以上の整理を概念的に示せば、次図のようになる。

埴輪 区分	年代 (西暦)	墳丘形式	主体部	形 象 埴 輪										円筒埴輪	人物・動物 配置形態	出土 須恵器	
				家	蓋	盾	大刀	鞆	鞆	貉	人物	馬	盾持				
(前期)	350	前方後円															
(中期)	400																
1'	450																
1	500	帆立貝	舟形石棺										有黒斑B種ヨコ	無黒斑B種ヨコ	特定区画集中	TK208	
2	550		横穴式石室													基壇面上に列状	TK47
3	600													多条凸帯			TK10
																	TK43
																	TK209

第7図 上野地域埴輪変遷概念図

(2)「上野型埴輪」成立にいたる背景

5世紀第3四半期をむかえ、前方後円墳はそれ以前の巨大規模から縮小化・均質化した。と同時に築造される数を大幅に増大した。また、このことと並行して初期群集墳が広範に形成されて

いった。

これらの背景としては、大規模灌漑等の最新の開発技術を駆使した広範な地域開発が着実に進行していったことが挙げられよう。その結果、太田天神山古墳に代表される巨大前方後円墳を頂点とした旧来の支配構造を打破して、地域内の各地に新たな地域的統合を実現した中小の首長層が輩出するとともに、家長層の有力化が急速に進んだ。

前述の古墳築造の変化は、この地域構造の変化に呼応したものであった。それ以前にくらべて、築造される古墳の数が大幅に増大していったことは言うまでもない。その場合、この新たな階層秩序づくりの過程で、埴輪樹立は必須の要素として組み込まれたので、その需要の量的拡大は筆舌を尽くしがたいものであったろう。この時期に生産体制の組織化が急速に進められていったのは、当然の帰結であったと考えざるを得ないであろう。その組織化の過程で、埴輪生産の先進地域だった畿内から新たに招来された専門技術者が深く関与したであろうことは、この段階から見られる窖窯焼成によるB種横ハケの広範な存在が如実に物語っている。

ただし、この段階の生産体制が必ずしも十分なものでなかったことは、一古墳を構成する円筒埴輪の製作手法の不統一・バラエティーから窺うことができよう。

1'期と1期の間を画するのは、生産体制が一段と整備されていった点であろう。その場合、単に1期の組織を継承・発展するかたちで継続的に展開していったのかと言うと、必ずしもそうとは言いきれないように思われる。B種横ハケの一斉に近い状態での消滅や、一次調整縦ハケ、2・3条凸帯、半円形透し等の定型化された円筒の成立は、新たな外的影響を強く受けたことを示唆するものと言えよう。

この段階に属する保渡田八幡塚古墳では、円筒埴輪列が中堤の両側、4カ所の中島の縁辺部、墳丘の裾部・基壇面・墳頂部に相互の口縁部を接する密立状態で確認されており、その総数は約4800本と推定された。また若宮八幡北古墳においても、密立状態で後円部の墳丘基壇面を二重に取り巻き、さらにそこから前方部へ台形状に連なっていた。⁽³⁴⁾ 墳頂部が削平されていたため、推測に過ぎないが、この縁辺部にも配置されていた可能性が強い。1古墳に配置される円筒埴輪の数が大きく増えていっていることがわかる。大量の人物・動物埴輪の集中的な樹立が急激・広範に浸透していったことも、この時期の画期性を示すものと言えよう。これらの変化の傾向は、生産体制が大幅に整備されていったことを十分推測させるものと言えよう。

と同時に、この広範に浸透した大量樹立の制自体が、上野地域が6世紀に入ると独自の展開をしていく端緒をなすものであったと考えることが可能である。器財埴輪における盾・蓋に限定された定型的な組成も、地域性の創出の一つとして理解できるものであろう。

(3)「上野型埴輪」の成立とその背景

器財埴輪の組成に見られる盾・蓋から盾・大刀・靱・柄・髻への変化を、単なる種類の増加現象と見ることは大きな誤りである。1期の盾・蓋は、前・中期の器財埴輪の武器・武具と威儀具の2大別の系譜に連なるものであろう。それゆえ、6世紀初頭のを最後に蓋が消滅するのは、

畿内における器財形埴輪の衰退過程に呼応した流れとして理解できるものであろう。

2期の盾・大刀・靫・靫・翳のうち、普遍的に近い形で認められるのは盾・大刀であり、次に靫であり、靫・翳との間には隔たりがある。組成の中心が武器・武具にある点が重要である。

特にこの時期新たに登場する大刀の存在意義は極めて大きいものと考えられる。当地域における大刀形埴輪は、その初現的な事例である6世紀初頭の前二子古墳、王山古墳の段階から、これ以降6世紀を通じて広範に、しかも画一的に見られる「楔形柄頭に振り環頭を付け、護拳用の帯の表面に三輪玉を連ねたもの」として定型的に成立している点が注目される。白石太一郎が指摘するように、この形式の大刀形埴輪の祖型が、その段階で畿内にあったいくつかの形式の中から、選定された可能性は考えられよう。たとえ、そうであったとしても、その選定の過程は、上野地域の主体的な動きとして見ていく必要があろう。と同時に、畿内においてはこの形式の大刀形埴輪が、現在までのところ、極めて少数であるのに対して、上野地域においては6世紀初頭以来、広範に普及したことは、東国から畿内への逆輸入の可能性もまた考慮に入れておくべきではなかろうか。

2期の初めの段階で、大刀をはじめとする新たな組成の器財埴輪が樹立されるのは、主として前方後円墳に限定されていたと考えられる。大刀形埴輪に表現された大刀の形式が王権のシンボルとしての倭風大刀に求められるとすることが、その成立事情に反映していると言えよう。

その代表的な事例である、前二子古墳、王山古墳は当地域における6世紀初頭段階の最大級の前方後円墳に属するものである。これらは、安中市築瀬二子塚古墳(前方後円墳、墳丘長78m)、前橋市正円寺古墳(前方後円墳、同70m)とともに当地域における初現的な横穴式石室を備えるものであったことは重要である。

当地域における横穴式石室の出現が、畿内における6世紀初頭の大王墳の主体部として採用される動きに呼応したものであったことは疑いないところであろう。これら初期横穴式石室を備える前方後円墳の分布を見てみると、当地域の中・西部に偏在していることに気付く。しかも、5世紀の有力前方後円墳の系譜に直接つながるかたちで成立したものは少ない。畿内における大王墳への横穴式石室の採用は、この時期の大和政権が大きな政治的動揺を経て、新たに王権を掌中にする過程で、新たな埋葬形式の採用を意味するものと理解されている。この時期の東国の有力地域への横穴式石室の浸透が、この畿内の歴史動向に密接に結び付いたものであったことは、十分推測されるところである。

2期における大刀形埴輪をはじめとする武器・武具の器財埴輪の成立がその最初の段階から、形式・配置形態に定型的な内容を有していたことは、この6世紀初頭を前後した時期の歴史動向を合わせて考えた時、はじめて理解できるものである。この段階に成立した器財埴輪の組成は6世紀を通じて継承され、しかもその内容をさらに充実させていった。

6世紀後半になると、上野地域をはじめとする東国の諸地域においては、畿内をはじめとする他の諸地域の衰退化の過程とは裏腹に、爆発的とも言うべき埴輪の盛況の時期を迎える。当地域

における2期の段階は、東国地域特有の埴輪体制の成立の起点となる大きな画期点にあったことが理解されるところである。この時期に成立した埴輪組成を「上野型埴輪」と仮称したゆえんである。

(4)「上野型埴輪」の定着

3期の埴輪の最大の特徴が、人物・動物埴輪群を基壇面上に列状に配置する点にあることは前述した通りである。これは、横穴式石室の定着とともに、石室の開口する墳丘南側が、古墳の正面観として重視されるようになっていった動きと大いに関係していると思われる。

実際の配置形態を見てみると、通常は、石室の開口部の西側脇を起点として、基壇面上をくびれ部から前方部にかけて列状に樹立されている。その場合、個々の人物埴輪は、基本的にその正面を墳丘外側に、馬はその側面を外側に向けている。このことは、明らかに墳丘外部からの視覚的効果を意識した樹立形態と考えざるを得ないであろう。それぞれの役割分担が造形的に表現された個々の埴輪を、立体的な配置形態をとることにより、意味ある劇的空間の創出を実現していった段階から、墳丘の表飾物としての側面により重点が移されていった段階への変質過程として理解できよう。

個々の埴輪を見てみると、特に大型前方後円墳に使用されたものが、大型品で過度に装飾的になっている点が目立つ。先年、玉村町教育委員会によって調査され話題になったオトカ塚遺跡（全長約90mの前方後円墳の可能性ある）から出土した全高・全長とも約1.5mを測る巨大馬は、⁽⁴⁰⁾その好例である。

一方、新田町の二ツ山1号古墳の調査で明らかにされた馬の列は、少なくとも12個体が連なっており、個々の埴輪に一定の役割分担を持たせた必要最小限の数量と考えるよりも、ひたすら豪華に飾り立てることに意が払われた結果と見るほうが当をえていると言えよう。

それでは、このような3期の埴輪の特徴が現出した背景としては、どのようなことが考えられるのであろうか。

この時期の古墳そのものを見てみると、つぎのような古墳築造上の変化が進行していたことが知られている。まず、横穴式石室は、巨石を使用してこれまでにない巨大な空間を造るようになっていった。特に石室の幅および高さを一段と拡大していったことが特徴的である。石室の幅を大きく拡大するためには、架構する天井石の従来の技術的限界を大幅にこえなければならないから、そのためには、これまでにない構築技術上の革新を必要としたことは明らかである。その代表的なものの一つである観音山古墳の横穴式石室は、玄室長8.25m、同奥幅3.95m、同高さ2.30mの玄室規模であり、この巨大空間の天井面を3石の巨石でカバーしていた。一方、壁体に加工石材を使用するようになったことも、これまでに見られなかった要素である。

ところで、観音山古墳の石室は、完成後程なくして天井石の重量負荷に壁体が耐えられなくなり、崩壊を来したことが推測されている。この観音山古墳と構造的に類似している前橋市の総社二子山古墳の場合も、天井石が前方へ大きく崩落している。⁽⁴¹⁾このことは、当時の技術力を大幅に

こえてまで、注文側が巨大な石室を望んだ結果とも考えられるよう。

豪華で豊富な副葬品の存在もまた、この時期の古墳に見られる特徴の一つである。金銅・銀装の環頭や頭椎の装飾付大刀、あるいは様々の装飾馬具、金属製の容器類等々の、この時期に特徴的な豪華な副葬品（金ピカ品）が圧倒的に上野地域をはじめとする東国の諸地域に集中するのは、畿内と東国との結び付きの強さを示すとともに、東国の首長層がこれらの品々の入手を強く望んだことを示していると言えよう。

これらの特徴のいずれもが、掌握した権力を誇示するために、古墳づくり全体を通じて視覚的に豪華に飾り立てようとした一連の流れの中に置くことができよう。埴輪の変化の傾向もまさしくこのことに呼応するものであった。

この時期の埴輪樹立が、上は前方後円墳から下は群集墳中の小型円墳にいたるまで、ほぼ全体に及ぶものであった点は、極めて特徴的なありかたである。しかも、人物・馬・器財の基本的な組成を共有していた点が興味深い。そのはじめは、王権のシンボルとして成立した大刀形埴輪を盾・鞆・軛とともに頂上部に所狭しとめぐらせ、墳丘の周囲にはおびたしい人物・馬を立ち並ばせた下條2号古墳のような径10mにも満たない小古墳が、額を寄せ合うように群在しているさまは、埴輪樹立の盛況ぶりと言うよりは、まさに異様の一語に尽きると言えよう。

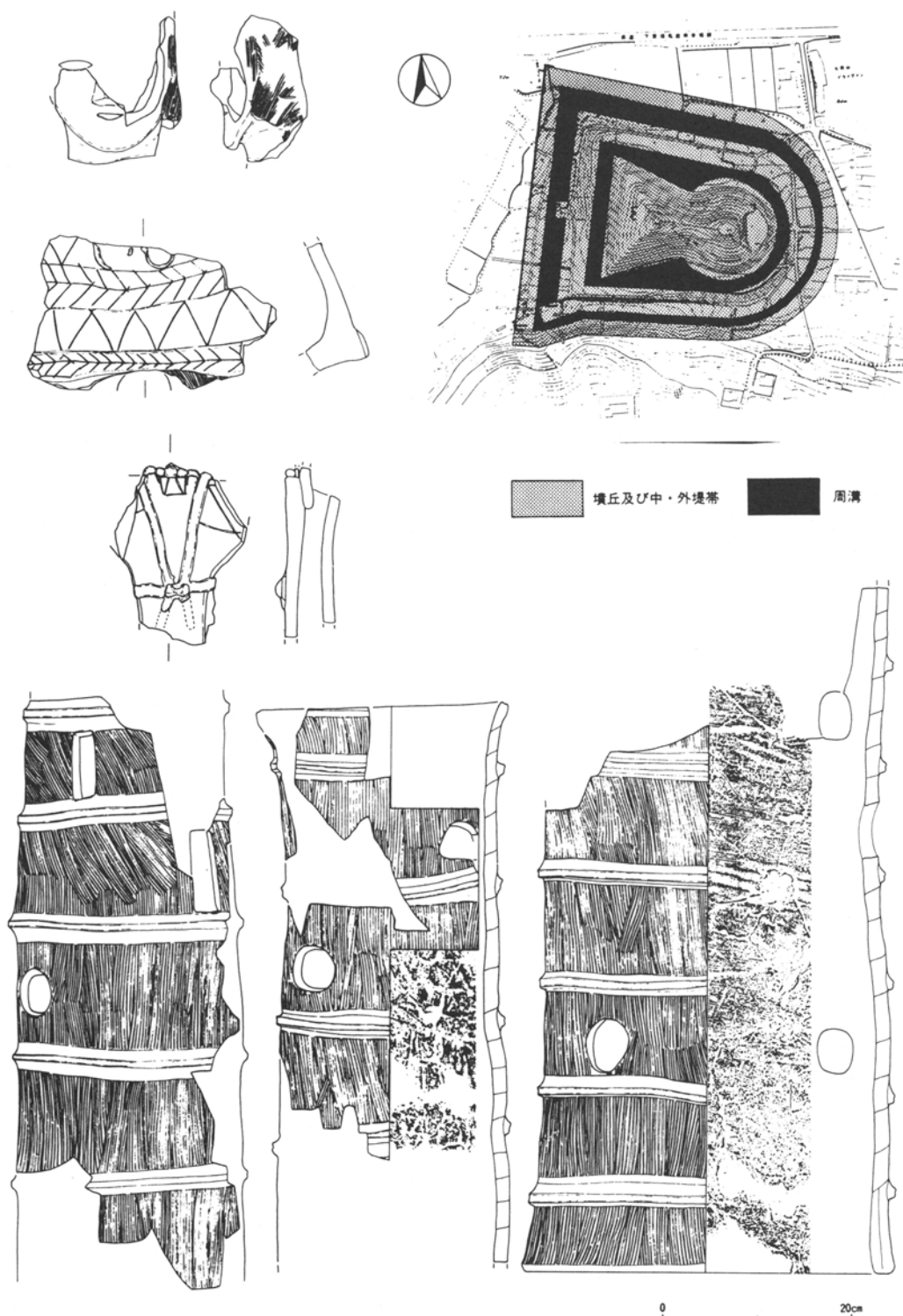
しかし、子細に比較検討してみると、基本的な組成は共有しているものの、古墳の規模に応じて、その内容は明らかに違っていた。人物埴輪について見てみると、下條2号古墳のそれは、すべて円筒形の基部の上に造られた上半身像に限られていた。また、腰の部分に表現された帯を除けば、衣装の表現は一切省略されていた。これに対して前方後円墳に代表される大型古墳からは、全身像、椅座像、上半身像等の種類があり、身には過度の装飾を施した衣装が表現されていた。同じ種類の人物像でありながら、両者の差は一目瞭然であった。

この普遍的といっても過言ではない盛況は、何を意味しているのかということ、「上野型埴輪」体制とでも言うべき、地域独自の埴輪樹立の制が成立していたことを示しているものと思われる。

このことと深く関係しているのは、この時期の前方後円墳の爆発的とも言うべき活発な造営である。それらの中で、全長70ないし100mの前方後円墳が相互に適当な間隔をおいて林立する状況が認められる。それぞれの下には、複数の50m前後の前方後円墳が認められ、さらに径30m前後の大型円墳、さらに中小の円墳からなる群集墳が存在し、いずれもピラミッド的な地域構造を復元することが可能である。「上野型埴輪」体制はこの地域構造とオーバーラップするかたちでできあがっていったものと思われる。

6世紀後半の上野地域をはじめとする東国における前方後円墳や埴輪の異常とも思われる盛況は、大和政権にとって東海や西日本の諸地域と比べれば、政治的関係においては、まだ未開拓であったことを物語るものと言えよう。と同時に、恐らく畿内からと思われる、豪華で豊富な副葬品の大量流入は、大和政権の東国への関心が急速に高まっていったことを示すものと言えよう。

6世紀末葉、物部・蘇我の二大勢力による主導権争いに一定の決着を見ると、大和政権は東国



第8図 七興山古墳墳丘概念図及び出土埴輪
(志村註(43)文献)

への積極的な進出をはかっていった。盛況の極致にあった東国の前方後円墳・埴輪樹立の突然の消滅は、旧来の地域の支配構造の否定にあったことは言うまでもないところである。

お わ り に

予定した紙数を大幅に過ぎてしまったが、今問題になっている七興山古墳の築造年代に触れずに終えるのは片手落ちになってしまうため、これに対する私見を述べて終わることにしたい。

筆者はかつて七興山古墳の築造時期について、主として人物・動物埴輪の中堤上への集中配置、円筒埴輪への横ハケ使用の残存等から、5世紀第4四半期の可能性を指摘した。

その後、志村哲はこの古墳の最も新しい調査報告の中で、周溝内から出土した須恵器と日本書紀の「緑野屯倉」の成立記事から、6世紀前半の可能性を指摘した。⁽⁴²⁾

一方、最近高橋克壽は、大阪府日置荘埴輪窯の資料との比較や形象埴輪の特徴から、6世紀後半の所産と位置づけている。この立場は、梅沢重昭が従来から主張してきた立場に、根拠は異なるものの近い見解である。⁽⁴⁴⁾⁽⁴⁵⁾

この中で、筆者のかつての見解は、今回の当地域の埴輪の編年の整理に基づくならば、撤回を余儀なくされることが明らかになった。現在は、次のような理由から、志村の主張する6世紀前半の理解に近い。

まず第一に、墳丘外の中堤上で人物・動物埴輪が認められたことは、少なくとも3期までは下らないことを示している。一方、器財埴輪の中に靱が認められていることから、少なくとも1期の段階までは逆上らないことになる。このようなことから、七興山古墳の築造を2期の段階、すなわち6世紀前半の所産とすることができよう。

このことは、高橋が指摘した、藤岡地域における埴輪生産拠点の成立時期を2期に逆上らせることによって、相違点を解消することができよう。また、2期の段階にこそ、当地域の埴輪生産上の画期点が想定できることも矛盾しない。

本稿を作成するにあたっては、下記の方々から援助を受けた。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略、順不同)

西藤清秀、前原豊、若狭徹、徳江秀夫、大西雅弘、南雲芳昭

註

- (1) 右島和夫「東国における埴輪樹立の展開とその消滅」(『古文化談叢』20集(下)) 1989
- (2) 右島和夫ほか『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (3) 現在までのところ、6世紀初頭の段階に盾・大刀・靫は認められるが、靫・靫はこれに時期的に後出する古墳からの出土である。
- (4) ①前原豊ほか『前二子古墳』前橋市教育委員会 1993
②前原豊ほか『中二子古墳』前橋市教育委員会 1995
- (5) 南雲芳昭・徳江秀夫・飯塚誠「若宮八幡北古墳の埴輪」(『高崎市史研究』4) 1995
- (6) 報告書を近刊予定している。なお、平成3年に日本考古学協会で研究発表を行った。
松島栄治・中村富夫・右島和夫「前橋市王山古墳の調査」(『日本考古学協会総会研究発表要旨』) 1991
- (7) 徳江秀夫「上野地域の舟形石棺」(『古代学研究』127) 1992
- (8) 須恵器の型式的理解は、主として田辺昭三『陶邑古窯址群』1966、によった。
- (9) 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐる」(『考古学研究』34-2) 1987
- (10) 右島和夫「上野における群集墳の成立」(『関西大学考古学研究室創設40周年記念考古学論叢』) 1993。後に『東国古墳時代の研究』学生社 1994、に所収
- (11) 円筒埴輪の用語は主として、川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2・4) 1978、によった
- (12) 磯貝朗子ほか『今井神社古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (13) 梅沢重昭「不動山古墳」(『群馬県史』資料編3) 1981
- (14) 大泉町教育委員会『古海松塚古墳群平成3・4年度発掘調査概報』1993
- (15) 右島和夫「保渡田3古墳について」(『三ツ寺I遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1988。後に『東国古墳時代の研究』学生社 1994、に所収。
- (16) 西田健彦・杉山秀宏「舞台・西大室丸山」群馬県教育委員会 1991
- (17) 少なくとも、井出二子山古墳の埴輪設置のための「別区」の可能性を指摘した若狭徹の説には反対である。
若狭徹『保渡田VII遺跡』群馬町教育委員会 1990
- (18) 若狭註(17)文献
- (19) 福島武雄ほか「八幡塚古墳」(『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯) 1932
- (20) 若狭徹氏から教示を受けた。
- (21) 南雲・徳江・飯塚註(5)文献
- (22) 調査担当者の三浦京子氏から教示を受けた。なお平成5年に実施された群馬県立歴史博物館の企画展で展示された。
群馬県立歴史博物館『第46回企画展 はにわ』1993
- (23) 小島純一『白藤古墳群』粕川村教育委員会 1989
- (24) 松島・中村・右島註(6)文献
- (25) 前原註(4)①文献
- (26) 前原註(4)②文献
- (27) 石塚久則ほか「塚廻り古墳群」群馬県教育委員会 1980
- (28) 千田茂雄『九十九川沿岸遺跡群3』安中市教育委員会 1994
- (29) 石川正之助「高塚古墳」(『群馬県史』資料編3) 1981
- (30) 右島和夫・田村孝・田口一郎・五十嵐信「上小堀稲荷山古墳の調査」(『高崎市史研究』2号) 1992
- (31) 篠原幹夫「芝宮古墳群」富岡市教育委員会 1992
- (32) 飯塚誠ほか「少林山台遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (33) 右島註(2)文献
- (34) 右島註(15)文献
- (35) 高橋克壽「器財埴輪」(『古墳時代の研究』9)雄山閣出版 1992
- (36) 白石太一郎「玉纏大刀考」(『国立歴史民俗博物館研究報告』50集) 1993
- (37) 白石註(36)文献
- (38) 白石註(36)文献
- (39) 土生田純之「畿内型石室の成立と伝播」(『大和王権と交流の諸相』古代王権と交流5)名著出版 1994
- (40) 担当者的小田沢佳之氏から教示を受けた。
- (41) 矢野和之「横穴式石室保存工事」(群馬県教育委員会『史跡観音山古墳』) 1981
- (42) 右島和夫「古墳から見た5、6世紀の上野地域」(『古代文化』42-7) 1990、後に『東国古墳時代の研究』学生社1994所収
- (43) 志村哲「七興山古墳範囲確認調査報告書V〜VII」藤岡市教育委員会 1990・1991・1992
- (44) 高橋克壽「埴輪生産の展開」(『考古学研究』41-2) 1994
- (45) 梅沢重昭「七興山古墳」(『群馬県史』資料編3) 1981

上野地域主要埴輪出土古墳

区分	古墳名 所在地	墳形 全長(m)	主体部	形 象 埴 輪											備 考
				家	蓋	盾	大刀	韌 柄	髷	男	女	馬	盾持	その他	
前期	朝子塚 太田市牛沢	前方後円 123m	竪穴式	●	●										P
中期	白石稲荷山 藤岡市白石	前方後円 145m	礫櫛	●										短甲	B種横ハケ
	赤堀茶白山 佐波郡赤堀	帆立貝 45m	木炭櫛	●	●									鶏・椅子・高坏・ 短甲	B種横ハケ
1	不動山 高崎市綿貫	前方後円 90m	舟形石 棺	●										不明器財	B種横ハケ
	今井神社 前橋市今井	前方後円 71m	竪穴式												B種横ハケ
	道場1号 高崎市浜川	帆立貝	竪穴式												B種横ハケ
	白藤Y-2号 粕川村膳	円 17m	竪穴式												B種横ハケ 白藤古墳群
	上野原4号 富岡市下高瀬	円 12m	竪穴式												B種横ハケ、TK208須恵器 上野原古墳群
	古海松塚 邑楽郡大泉町	帆立貝 39m	竪穴式								●	●			B種横ハケ、TK208須恵器 古海松塚古墳群
	井出二子山 群馬郡群馬町	前方後円 108m	舟形石 棺		●					●	●	●		小型猪（人物 に付着？）	極めて少量のB種横ハケ
	保渡田Ⅶ 群馬郡群馬町	帆立貝 （？）	竪穴式	●	●	●				●	●	●	●	壺・犬・猪	
	八幡塚 群馬郡群馬町	前方後円 102m	舟形石 棺							●	●	●	●	器台にのる壺・	
1	舞台1号 前橋市荒砥町	帆立貝 40m	竪穴式	●	●	●									極めて少量のB種横ハケ
	若宮八幡北 高崎市八幡原	帆立貝 46m	舟形石 棺		●	●				●	●	●	●	犬・鹿	B種横ハケ破片ごく少量
	白藤V-4号 勢多郡粕川村	円 21m	竪穴式									●			
	前二子 前橋市西大室	前方後円 93.7m	横穴式	●	●	●	●					●	●		MT15須恵器
	中二子 前橋市西大室	前方後円 111m	横穴式 （？）				●	●	●				●		
	七興山 藤岡市上落合	前方後円 145m	横穴式 （？）	●		●		●		●	●	●			
2	塚廻り1号 太田市竜舞	帆立貝 26m	竪穴式				●	●		●	●	●			
	塚廻り4号 太田市竜舞	帆立貝 23m	竪穴式	●		●	●			●	●	●			
	高塚 北群馬郡榛東	前方後円 60m	横穴式	●		●	●	●		●	●	●		器台にのる壺 ・弓	
	観音山 高崎市綿貫町	前方後円 97m	横穴式	●		●	●	●		●	●	●	●	鶏	TK43須恵器
	山王二子山 前橋市山王町	前方後円 52m	横穴式	●		●	●	●		●	●	●			TK43須恵器
	小泉大塚越 佐波郡玉村町	前方後円 45m	横穴式	●		●		●		●	●	●	●		MT85須恵器
3	蛇塚 伊勢崎市日乃出	前方後円 55m	横穴式			●	●	●	●	●	●	●			

区分	古墳所在地	墳形 全長(m)	主体部	形 象 埴 輪											備 考	
				家	蓋	盾	大刀	劔	鞘	髷	男	女	馬	盾持		その他
3	内堀M－1号 前橋市西大室	帆立貝 35m	横穴式	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	矛	
	少林山台2号 高崎市鼻高町	円 18m	横穴式	●		●	●	●	●	●	●			矛		少林山台古墳群
	皇子塚 藤岡市三ツ木	円 29m	横穴式			●	●	●	●	●	●	●				
	下條2号 多野郡吉井町	円 8 m	横穴式	●		●	●	●		●	●	●				多胡古墳群
	富岡5号 富岡市七日市	円 29m	横穴式			●		●	●	●	●					
	富岡79号 富岡市芝宮	円 17m	横穴式	●	●	●	●	●		●	●	●		帽子		芝宮古墳群
	オクマン山 太田市脇屋	円 36m	横穴式	●			●	●	●	●	●					
	後二子 前橋市西大室	前方後円 79m	横穴式	●		●	●	●	●		●					
	二ツ山1号 新田郡新田町	前方後円 74m	横穴式	●		●	●	●	●	●				鳥・槍・帽子		TK209須恵器